

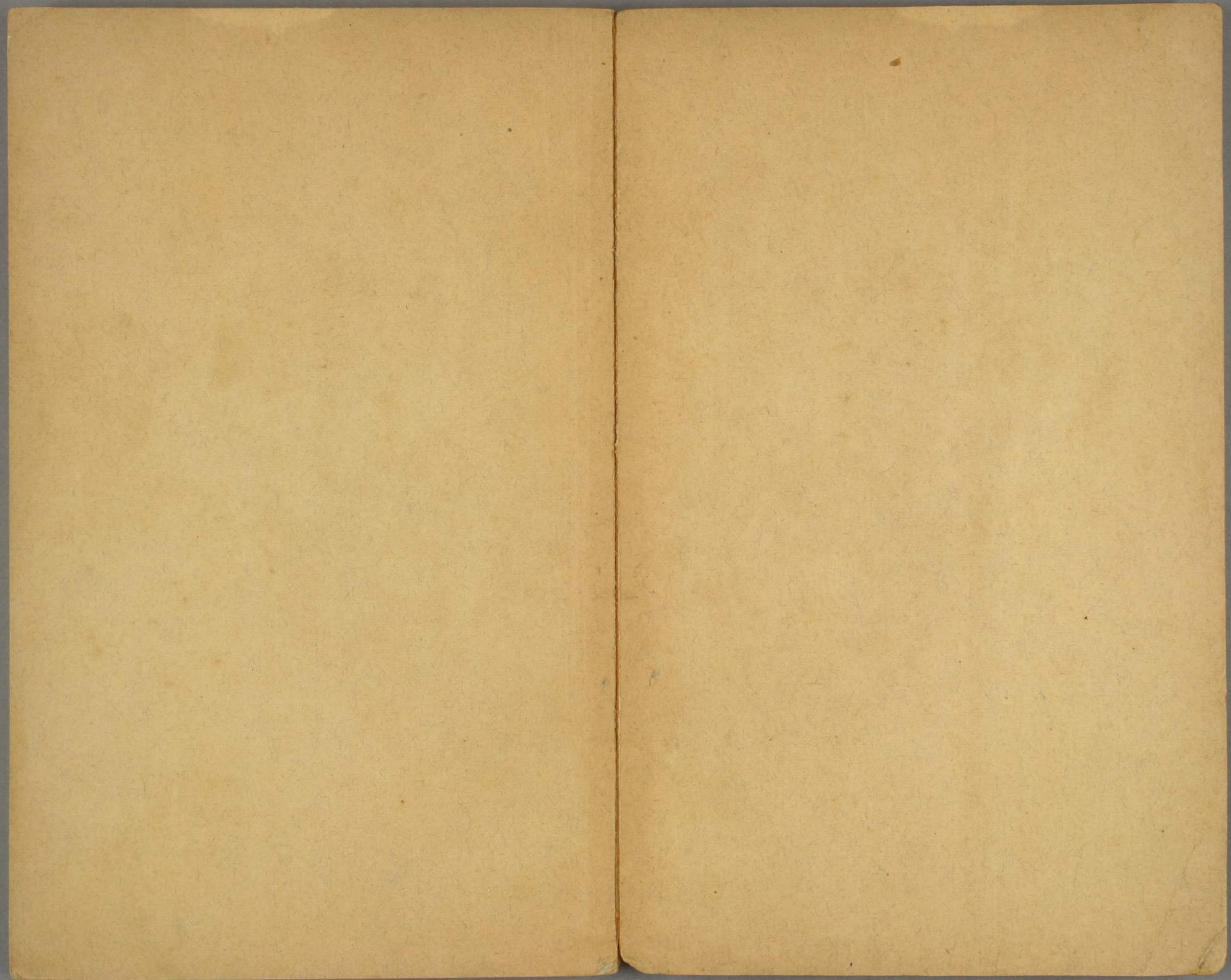
5

10

15

20

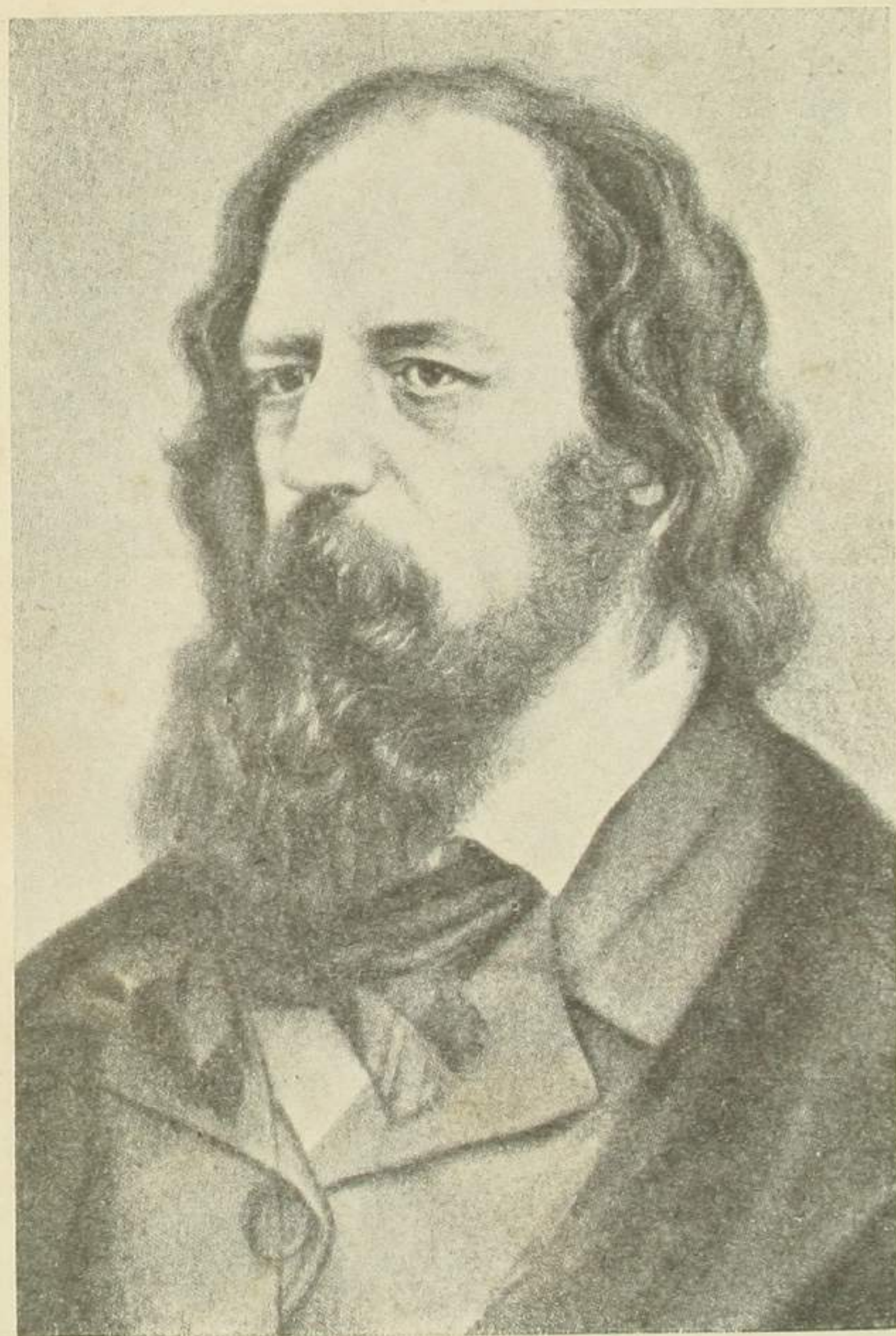
テニソンの詩
片上天柱



坪内逍遙書簡
片上天絃譯

テニソノ詩

全



ALFRED TENNYSON.

御稿拜見いたし候叶ふべきだけ原意を損すまじとの御苦心感心いたし候直譯流の晦澁にも流れず註解風の冗漫にも墮することなくしてふと讀めば御自作かと思はるゝばかりに句作りの流暢なる、原作にては打かたぶかるゝ句までがおほかたは讀みながら解し得らるゝほどに平明なるなど先づ最も喜ばしき御出來と存じ候一篇毎に解題やうのものを添へられたるも用意深切にて甚だよし思ふに我が幼き譯詩壇に於て此の以上を望ま^んは早つゞきの三

伏に沛然の雨を得て更に皎々の月をほしがる榮耀沙汰に
候はん餘は追つてお目にかゝり口上にて申すべく候草々

卅八年八月

道 遙

天 絃 君

はしがき

詩を譯するは至難のことに屬す。況んや語脈同じからぬ西詩を翻して、これをわが國のことばにうつさんことをや。況んや詞章の典麗と音律の巧妙とを以てきこえたるテニソンの詩をや。されば、こゝにはおぼろげながらもせめてはその意をだに傳へんと欲して、原句のまゝにうつしては其の意明かならずと思はるゝくだりには、や

疎註めける詞句をさへ恣に添へ加へ、更に簡短なる解
 題並びに別註を附し置けり。なほ能ふかぎりはこの詩人
 の面影をうかゞふの便よすがとなるべきものをえらみて譯出せ
 んこと譯者が當初のねがひなりしかど、僅々百數十頁の
 小冊子に、この一代の詩宗が面目の一端をだにうつしい
 ださんことの難きはいふをまたず。讀者深く僭私を咎め
 ずんば幸なり。

卅八年八月

譯

者

目次

テニソンの略傳	一八
無爲の島 (The Lotus Eaters.)	一
唱和	一五
船旅 (The Voyage.)	五
かひなき涙 (Tears, idle Tears.)	六

妖	姫	(The Lady of Shalott.)	五
死にゆく白鳥	(The Dying Swan.)	二六	
ユリシス王	(Ulysses.)	二六	
こだま	(Splendour Falls.)	二五	
船出	(Crossing the Bar)	二六—二六	
以上				

テニソンの略傳

文運の隆昌たぐひ稀なりし井クトリア女王朝の詩壇に現はれて、一代の代表的詩人とたゞへらるゝものをアルフレッド・テニソン Alfred Tennyson (1809-1892) となす。テニソンは千八百九年八月六日、英國リンコーンシャーの一小村サムズビーに生れき。父はその村なる寺領の監督にして、母は一牧師の女なりき。幼にしてルースなるグラムママスクウルに學びしも、後家にかへりて専ら父の薰陶を受け、其の十八歳のをり兄チャールスとともに「兄弟詩集」

(Poems by Two Brothers) 一卷を公けにし、その翌年ケムブリッジなるトリニティ・カレッジに入りぬ。テニソンが心友アーサー・ヘンリー・ハラムと斷金の交情を結ぶにいたりしも亦まことにこの時のことなり。トリニティに入りてのち、大學の懸賞詩募集に應じて「ティムブクトゥ」(Timbuctoo.) の一篇をもものし、當選して賞を受けぬ。千八百三十年さらに「抒情詩を主とせる詩集」(Poems Chiefly Lyrical.) を出だせり、詞句典麗音律巧妙にしてまゝキーツが絢爛の趣をそなへたりといへども、彼のひとへに美そのものをのみうたへるとはおのづからその類をことにせりき。この詩集世に出

でし年テニソンは父を喪ひ、卒業に及ばずして大學を退きしが、こえて千八百三十三年、心友ハラムにはかにヴェンナの客舎に逝きぬ。後年世に公けにしたる「紀念のために」(In Memorium.) の一篇は、そのふかき哀悼の情を傾け悉して、生死の一大事をうたへるものなり。かくて千八百四十二年、前に公けにしたる詩を纂輯し、これに若干の新作を加へて二巻の詩集をいだせり。この時にいたりてテニソンの詩技は漸くその圓熟の域に達したりと見るべく、其の題材の豊富にして詞章の典麗なる、情緒の優婉にして思想の高雅なる、あきらかにテニソンが一家の

特色を發揮せり。千八百四十七年「姫宮」(Princess.)とすへ
る物語歌をいだし、五十年「紀念のため」を上梓す。この
年テニソン齡四十一にしてエミリー・セルウッドを娶り、又
ウチャーヅウチースについて桂冠詩宗の職を襲げり。のちワイ
トの島なるフナリングフナード及びサセックスのブラックダウ
ンにひきこもりて、むねと叙事詩及び劇詩に筆を染めき、
有名なるアーサー王の傳説をうたへる「アーサー王の歌」
(Idylls of the King.)の内四篇は千八百五十九年に、其餘は
同六十九年に、「イノック・アーデン」(Enoch Arden.)は同六十四年
に、劇詩「メリー女王」(Queen Mary.)は同七十五年に出でたり。

其の他すぐれたる作品甚だ多かれど、徒らに其の名を並
べんも益なければ省きつ。
テニソンの生涯は平静和樂の一語に盡く。千八百九十
二年十月五日の夜、濛々たる白霧は地を蔽ひ、皎々たる
秋の月はしづかに窓を覗ふ閑居の一室に、その白き光に
照らされて、手には沙翁の一卷をもち、指頭なほ「シムベ
リン」中の挽歌を指したるまゝに、この一代の詩宗はかへ
らぬながき眠りに就きぬ。遺骸はウエストミニスタア・アッ
ペイの詩人瑩域に葬られき。

テニソンの詩はその題材の範囲極めてひろく、冥想抒情の詩はいはずもあれ、又さらに叙事詩劇詩にさへその筆を染めにしかど、その最もすぐれたりと見るべきは蓋しその抒情詩ならん。かの優婉なる情緒をうたふに圓熟せる詞句をもちひて聲調色彩の美を現じ來りほとく其の極致に迫るの趣は、これまことにテニソンが特技なり。マシウ・アーノルドが「蒸溜せる語にやどれる蒸溜せる思想」(“Distilled thoughts in distilled words.”)なりとたへてその詩のつひに外國語にうつすべからざるをほのめかせるも宜なり。しかれどもテニソンの詩はひとりその技巧の上のみす

ぐれて、内容のとぼしき一派の作品のごときものにあらず。自然をうたうてはウチーヅウチーの如く乾枯ならず、過去を詠じてはスコットのごとく淺膚ならず。よしや詩歌を以て一世の思潮を導く豫言者の面影はこれなしとするも、そのよく當代の進歩せる思想を代表して時世の精神をうたへるは争ふべからず。テニソンはふかく天地の大法を畏敬し、整然たる軌道をあやまたずして不斷の精進を懈らず、現世をすてずして常に理想の境に遊ばんとす、思想穩健にして内に従容たる覺悟を藏す。蓋し其の思想や必ずしも最新最美のものにあらずとするも、尙よく當

代英人の理想をうたひえたるものと稱ふべきなり。

テニソンの詩

片上天絃譯

無爲の島

人生果して辛勞力作に値するや否やてふ疑のこゝろをやどせる此の一篇は、蓋しテニソンが向上的理想の反面をうたへるものにして、次に掲ぐる「船旅」、「ユリシス王」などの諸篇と對比せしめて見るべきものなり。原作は詞句の節調もいとたくみにして、よく倦怠逸惰の詩情に協ひたれば、以て作者が技巧の一端をうかがひ知るに足るべし、千八百三十二年（作者二十四歳）世にあらはる。

「山やまなす浪なみはたちまちに
舟ふねを岸きし邊へに近ちかづけん
つとめよやよとユリス二スは
陸くわをさしてぞ叫さけびける

やがて真ま晝ひるを過すぐるころ
人々ひと陸くわにのぼりしが
こゝは暑ひかもとこしへに
夕ゆふ近ちかくぞ見みえにける

懈たぬき夢ゆめ路ぢをゆく人の
おもき太と息いきをつくごとく
岸きしをめぐりてたてこめし
太たい氣きは倦うみて力ちからなく
そよとだにせぬものうさよ

谷たに間まの空そらを見みあぐれば
まどかにてらす月つきのかげ
細ほ谷たに川がはのせゝらぎは
けはしき嶮が崖けにながれ沿そひ

糸の烟のなびくごと
おちてはしばしたゆたひて
また落ちくだる風情なり

島ゆく小川幾千筋
あるひはうすき白衣の
小霧こめたる帳かや
おちゆく水のゆるやかに
いとゞしづかにふしなびく
煙のごとくながれゆく

あるは流るゝ水のもの
光と影のちら／＼と
見えつ隠れつゆらめきつ
水泡の面の懈げにも
めぐり／＼て浮びゆく

舟ゆくまゝに人々は
きらめき光る川水の
山はるかなる源泉を

流れていて、海原に
注ぎくだるを、目にも見つ

はるかに遠き三つの嶺

幾年解ぬ白雪の

高嶺の上に赫灼と

照す夕日にてりはえて

沈黙に立てるさまも見つ

時雨のごとくふりくだる

滴の露にうるほひて

群れたつ叢林を蔽ひつゝ

小山をめぐる一列の

松の木立は蔭くらし

山の峽の奥ふかく

はるかに見ゆる谷あひや

松の並木をめぐらして

黄金のいろに忘郷果樹の

花さきにほふ丘の邊や

薰^{かほり}に 匂^{にお}ふ 沼^{ぬま}草^{くさ}の
 色^{いろ}は ゆかしき 浅^{あさ}みどり
 姿^{すがた}や さしく 咲^さみちて
 めぐりめぐる 谷^{たに}々^々や
 風^{かぜ}かほるなる 牧^{まき}原^{ばら}や
 かゝるながめの 惜^をしまれて
 茜^{あかね}に 匂^{にお}ふ 西^{にし}のそら

沈^{しづ}む 落^{おち}日^ひの 光^{ひかり}さへ
 たゆたふごとく 見^みゆるかな
 あゝとこしへにもの みな
 こゝは かはらぬ 島^{しま}なれや
 紅^{べに}蓮^{れん}も えたつ 夕^{せき}陽^{やう}の
 つよき 光^{ひかり}を 脊^せにあびて
 黒^{くろ}きおもは 色^{いろ}蒼^{あそ}く
 眼^{まなこ}や さしく 愁^{うれ}たげの
 無^む爲^いの 島^{しま}人^{ひと}い くらりか

舟ふね近くこそ來きたりけれ

かをりもにほふ花はなや實みの
たわゝにつける忘わす郷こ果くだ樹まの
小こ枝えだかざして島しま人びとは
船ふねなる人ひとに興あはへしが
靈たましきその果みを味あじへば
げにたれかれのわかちなく
木この實みにゑひておのづから
逆さかまく波なみのうちむせぶ

しらべをきけど故郷ふるさとを
はるかに遠とほきとつくにの
岸きしうつ波なみとおもはれて
舟ふねなる友とものうちかたる
その聲こゑ音ねさへいとかすか
黄泉よみの國くになる幻まぼろしの
ものいふごとくきこゆなり
さめて現うつの身みながらに
ふかく夢ゆめ路ぢを辿たどるごと
またわが心こゝろ臓ねのときめきも

さやかに耳にひびくなり

月は東に日は西に
二つの光あつめてぞ
黄金のいろにかゞやける
砂のきしべに人々は
身をよこたへぬあゝかくて
おぼろながらに故郷の
妻子奴婢をそこはかと
懐ひ出ることたのしけれ

さあれどとはに永久に
波まさかへる海原も
舟をすゝむる權さへも
空しき潮の花ちりて
ゆくへも不知にさだめなく
漂ひめぐる大和田も
たゞひたすらにかぎりなく
ものうくこそは見えにけれ

されば一人が今は早や
歸りゆかじといひ出れば
げにもわれらが故郷は
波路はるけき島の國
今は再び大和田の
波にさまよひ舟うけて
還るもうしやいつまでも
こゝに住まばや諸共に
こゑそろへてぞ歌ひける

唱和

一

そことしもなき樂の音の
いとしめやかに聞ゆなり
たとへば薔薇の咲きみちて
軟草の上には花弁の
こぼれて落つる音よりも

雲母閃く岨路の

かげほのくらさ花崗石
その立ち並みし岩間ゆく
しづけき谷の眞清水に
零るゝ露の音よりも

またはつかれし眼をば
静かに軽く、つかれたる
臉にふたぐそれよりも
やさしき樂の妙音は
それよよろづの福祉の

光あまねきみそらより
美しき夢さそふごと
いともしづかに聞ゆなり

地をながむればこゝかしこ
冷たき沼の水ふかく
常春藤くさく纏りて
こゝしき巖のかげよりは
眠れる罌粟の花を垂れ
流さゞめく小川には

玉藻花藻の糸ながく
葉はゆらくとさゝ泣けり

二

あゝいかなれば萬象は
なやみをすてゝ休息を
たのしむ頃をわれらのみ
重き苦しみがれ得て
たへぬ悶に身もさゆる

あらゆるものに休息あり
など靈長のわれ等のみ
營々として苦みつ
永久のなげきをするやらん

ひとつの憂愁さりゆけば
またあらたなる憂愁に
やむときもなくしづみつゝ
翼たゝまずとこしへに
さまよひめぐりやまざれば

聖きうまゐの慰安の
尊く靈しき妙香に
額をひたすこともなく
「世にこゝろゆくものとは
たゞ静安のほかぞなき」
かくと心の奥ふかく
うたふ聲さへ耳にせず

あゝ萬物の靈長と
神が創造りしわれ等のみ

いかなればかく苦しみの
つらきなやみはするやらん

三

見よかの森のたゞ中に
木末吹きゆく微風に
つぼめる嫩芽おのづから
わか葉とひらき萌えいでゝ
晝は照りそふ日の光
夜はうるほす白露の

恵みを受けていやましに
緑いろましひろごりて
ゆくすゑおもふさまもなし
されど秋風ふきくれば
葉は黄に褪せて落ちしほみ
風かぜのまにく飄ひるがへる

見よ夏の日にてらされて
あまきみのりは自おのづから
汁つゆ滴したらん林りん檣ごの果み

肉しはゆたかに熟うるゝとも
やがて寂さびしき秋あきの夜よを
音おともしづかに落おつるなり

あゝ萬物ものはおのづから
肥こえたる土つちに根ねを下おろし
みづからすべき勤つと勞めなく
さだめの日ひ數かず經よるまゝに
日ひ毎ごとくに生おひながら
花はなそのまゝに果みとなりて

熟^うれて腐^{くさ}りてやがて落^おつ

四

いとほしいかなほのぐるき

碧^{みどり}湛^たへし海^{うみ}原^{はら}に

窮^{きゆう}窿^{りゆう}なしてほのぐるき

碧^{みどり}の空^{そら}のたちおほふ

死^しこそわが世^よの終^{はつり}なれ

あゝいかなれば人^{ひと}の世^よの

つひに苦^{くる}しきなやみなる

たゞこのまゝにやすらかに

なすこともなくあらしめよ

時^{とき}すみやかにすぎゆけば

東^{あづか}のまにして唇^{くちびる}も

うごかず黙^{もく}しはてぬべし

たゞこのまゝにやすらかに

なすこともなくあらしめよ

この有爲の世にかはりなき
永恒のものは何やらん
萬象はうつしよの
きはみとともにきえうせて
かのもの凄き過去かたの
底なき淵ぶちに沈しづむらん
たゞこのまゝにやすらかに
なすこともなくあらしめよ
あゝ世の悪とたゝかひて

何の快樂かえらるべき
吼なけり高たかまり山やまをなす
巨浪こほなみこえてすゝむとも
何平和ななのありぬべき

よの萬象もんざうに休安やすみあり
みのり足りてはおのづから
黙々もくもくとして墓はかに入る
熟じゆくりて落ちて亡はなびゆく
われに與あたへよねがはくば

あゝ永久の休安を
はた常闇の死のくにを
夢ゆたかなる安慰を

五

ながれて下る細流の
うたのしらべをきながら
半ば閉ぢたるまなざしに
夢か現にさまよひつ
眠りゆくかと覚えなば

山の端に生ふ没薬の
木立をてらす夕日影
わかれを惜みたゆたへる
琥珀ながるゝ光のごと
夢より夢にねむりなば

または互ひのさゝやきの
そのことはを耳にせば
または日毎に忘郷果を

味あじひながら岸きし近く
 ゆらぐ小波なみさてはまた
 しづかにめぐりよせかへる
 乳色ちいろなせる浪なみの花はな
 咲さきちるさまをながめなば
 またはしづけき憂愁うれしに
 すべてこゝろをうちまかせ
 深ふかき沈思おぼにふけりなば
 または墓場はかばのくさの下した

今いまはむなしき白骨びやくこつと
 黄銅ワラの甕かめにねむりたる
 振ふり分わけ髪かみのともどちの
 今いまもむかしのおもひでを
 心こころひそかに繰くりかへし
 おもひめぐらし物思ものはば
 あゝいかばかり樂たのしからん

六

妻つまとすみつる往いにし日の

そのおもひでぞ慕はしき
ふる里いでし其の折よ
かたみに抱きうち泣きし
その涙こそこひしけれ

さはあれ今はなにごと
かはりはてたり故郷の
ともに集ひし圍爐裏邊も
いまは冷たくなりけらし
のこし置きつるわが兒こそ

家のあるじとなりつらめ
面もかはりはてつれば
われ不意にかへりなば
幻のごとおもはれて
たのしくすめる故郷の
そのまとゐをやみだすらん

さらずも今は(三)テロプを
いひよりつどふ王たちぞ
恣まゝにもすみあらし

わが家だから食みつくし
わが宮にすむ俗人は
彼等の前にトロイなる
十年のいくささてはまた
わがいさましきふるまひを
さながら今はおほかたは
わすられはてしことのごと
歌ひいでゝやあるならん
波路はるけきふるさとの

イタカの島はあさましく
擾れたりとやさらばよし
擾れしまゝにあらしめよ
神のこゝろは祈るとも
なだめんことのかたければ
再びもとにとゝのへて
さだめんことは難からん
死よりもさらに忌はしき
さわぎこそあれ、禍亂は
禍亂につきくるしみは

くるしみにつぎ、老人に
ながき勤勞や、いくたびの
戦にこゝろうみはてし
舟のゆくてを示らすてふ
星ながめてぞかきくもり
眼^{まなこ}眺める人々に
つらき業こそふるさとの
イタカの島にはありときけ

七

さもあらばあれしづかにも
きよくたうとくほの暗き
みそらの下にとこしへに
凋^{しぼ}まぬ花の床にして
眠^{ねむり}をさそふ暖風の
低く吹きゆく夕ぐれを
しづかに半眼見ひらきて
紫^{むらさき}こむる丘^{かみ}邊より
かゞやき下る川水の
しづかに落つるさま見れば

繁る葡萄の木のまごし
露をふくめる峪の
洞より洞によばはりて
ひびきかよふをさくときは

巻葉垂葉のたうとげに
組みかさなれる繁みより
瑠璃碧なる川水の
ながれ落ちくるさま見れば

そのたのしさはいかならん

よし岸近くゆかずとも
潮きらめく大和田の
はるけき波を音にきゝ
またほど遠く眼にも見ば
そのたのしさはいかならん

松の木かげに匍匐ひて
潮鳴りひびく海の音を

聴くばかりだにたのしきや

八

木もなき嶺の麓にも
入江々々のみぎはにも
忘郷果樹の花ささいてぬ
日ねもす風は吹きめぐり
日數ふるればいやましに
しらべかすかになりまさる

空虚の洞やさびしげの
小徑をすぎてうちつゞく
薫にほふ丘の邊を
めぐりく^て忘郷果樹の
花の黄金の粉ぞちれる

あゝ沖遠くあら波の
逆巻きかへり湧くところ
巨鯨潮噴く大和田を
或ひは右に漕ぎめぐり

あるは左に舟を向け
はやおほかたの勤勞は
足らぬかたなくなしはてぬ

さなりわれ等はもろともに
こゝろ一つにいつまでも
かはらぬ盟さだめばや
こゝ谷多き忘郷果樹の
島につどひてとこしへに
うき世のことはよそにして

ならば丘邊に神のごと
やすけくすみて暮さんと

見よ神々はかたはらに
靈酒の甕を据ゑおきて
下千仞の壑々に
雷はるかはためかし
雲はみそらの星の世の
黄金燦爛に鏤めし
宮居のほとり飄々と

舞ひめぐりつゝ、
神座にありてほゝ笑みて
荒れにし人の國原を
はるかに遠く瞰下せば
凋萎・疫癘・飢餓や地震
海にはあらし吹きすさび
砂漠の原はもえあがり
ものゝねひびく撃鬨
焰つゝめる町々や
荒ぶる波に沈む舟

人は祈りて合掌す
されども神はえましげに
下界はるかにひびきくる
人のなげきや昔より
例さわなる人の子の
そのわざわひの始終を
かたる聲音はたかけれど
意味なきことをきくごとく
人の呻吟やためいきの
その悲しげのひびきさへ

たのしき樂ときくごとし

かゝるかなしきうたごゑは
土をたがやす人々の
からさうきめは見ながらも
はでしもしらぬ労働に
蒔きては刈りつ年々に
麥、酒、油くさくの
たゞいさゝかの報酬をば
たくはへながら末つひに

その身も亡びうせはてゝ
(さゝやくこゑのいふをきけば)
あるは下界にとこしへの
苛責をうくるものもあり
あるは浄土の谷にゆき
やがては百合の床の上に
疲れはてたる身をなげて
やすらひすむもあるぞてふ
かゝる終末の來るまでは
やむときもなくうたはるゝ

げに　く　あはれねむりこそ
勤苦よりぞたのしけれ
深き水原のたゞなかに
あらぶ波風しのぎつゝ
押す櫓引く櫓の辛きより
岸の上こそたのしけれ
あゝいこへかし伴侶よ
いまはふたゝび漂浪の
旅にはゆかじよもゆかじ

註

(一) ユリシス　ユリシス(Ulysses)は希臘なるイタカ(Ithaca)の島の王なり、
トロイ戦争にたづさはれる數多き希臘古英雄の中にありて、わけても堅
忍不拔の剛勇を以て聞えたり。トロイのいくさはてゝのかへるさ、くさ
くの災禍にめぐりあひつゝ、コリンス灣をさして船をすゝめゆく折柄
嵐ふき起りて九日にわたるも歇まず。一行遂に「無爲の島」に流れつき
ぬ。
(二) 忘郷果樹　ロータス(Lotus)は棘ある小灌木にして多く北亞弗利加に
産す。和名を君遷子といへども、こゝにはわざと忘郷果樹の字をあてた
り。蓋し、この果を啖へば忽にして家を忘れ友を忘れて、とこしへにこ
の島にとどまらんことを願ふに至ると傳へらるゝが故なり。

(三) ペネロプ　ペネロープ (Penelope) はユリシスの妃なり。ユリシス遠征して還り來らざること二十年、今は其の生還の望み殆ど絶えたるに乗じ、妃の容色を慕ひて婚を求むるもの多く、皆ユリシスの居城に來り集ひて、日夜燕樂をほしひまゝにし、剩さへユリシスが一子テレマカス (Telemachus) を亡はんと圖る。而も貞淑なるペネロプは操を守ること二十年一日の如く、言を左右に托して終に應ぜず。かゝる折柄女神ミナアヅ (Minerva) の冥護によりて、ユリシスゆくりなくも還り來る。

船 旅

完全充足せる理想郷に到達し圓滿無上の生活を実現せんと欲して精進向上窮りなきわれ等の人生は、うつくしき幻を慕うてはてしなくめぐりゆく船旅にもたとへつべし。この一篇はまさに斯の意をやどせるものにして、さきの「無爲の島」とは正反對に、世路の艱難に處して邁往不退轉なる作者が觀念をうたへるものなり。千八百六十四年 (作者五十六歳) 世にあらはる。

港の口にたゞよへる
塗れる浮標をばあとに見て

おどるこゝろのよろこびや
われらはそゞろうれしさに
南をさしていそぎつゝ
飛ぶがごとくに船出しぬ

磯をめぐれる浦々や
水やそらなる海原の
眼にも耳にもことごとく
あたらしからぬものぞなき

あゝわが船のゆくところ
たのしきこの世いつまでも
めぐり圓かにはてしなし
さればわれらが慕ひゆく
船路はげにもこれよりぞ
いやはてもなくとはならん

二

いとあたゝかき微風は
額をはらひ吹きいでぬ

綱具はきよとなりひじき
真帆も片帆もはためきぬ

船の舳先にきざみたる

海の女神の頭型は

潮鳴してくだけちる

飛沫をあびて波切れば

疾風も除けて吹きのきぬ

げに船脚のはやければ

さしもわれらが大船も

ゆらぎよるめく心地しつ

東さして船ゆけば

昇る朝日の郷邊をぞ

われらは慕ひもとむらん

三

日輪波に沈みゆき

こゝより夜ぞせまうくる

地水のはては紅に

爛々として燃えわたり
影をひたせる黄金の
波のほのほもさえゆけば
穹窿を射わたる光矢の
さらめく下に眠るをも
われらが長き船旅に
あゝいくたびか見たりけん
萬象眠る夜をこめて
やがてさしこん黎明の

空をのぞみて奔るとき
徐かに垂るゝたそがれの
紫紺の裾の衣のいろ
われらが長き船旅に
あゝいくたびか見たりけん

四

見なれぬ星は夜もすがら
海のはてよりさしいでゝ
光もさやにきらめきつ

飛ぶにも似たる船脚の
すゝむまにく海原の
地水のはてもうつりゆけば
倏忽として中空に
星かげはやも昇りたる

おほふものなき海原の
たかまる波の大和田に
雲なき道をほるくと

疾く駛りゆきあるはまた
ほのめさめぐる月暈の
かぐるき圓楯のたゞなかに
光りきらめく銀の
浮彫飾かや照りわたる

五

船ゆくまゝに右左
峯むら立てる岩島の
姿もかはるながめかな

岡邊にたてる町々は
遠くさだかに見えわかず

かの風さむき北海の
長き岬をうちめぐり
白露布ける北國の
緑の牧場あとに見て
はてだに知らぬ東海の
海原はるか越えゆけば
波あたゝかき海に入り

逆巻きめぐる巨浪の
肉豆蔻生ふる岩蔭や
丁子花さく島が根を
巻きかへりつゝ洗ふかな

六

またある時は南洋の
火焰熾に噴き騰る
嶺のふもとをわしりゆき
またある時は灰の雨

烙けたるまゝに降りくれば
ふもとの岸もほのぐらく
おのゝく波もかき濁り
ひろごりゆけばそのながめ
奇しき毛羽のとぶごとく
また黒松の降るごとし

またあるときは砂漠の地
瘴霧たちまよふ大野原
またあるときは口ひろき

河のほとりにうちそひて
いそぎわしりつ過ぎゆけば
並ぶ岡邊やくれなるの
花もさくなる森木立
またゝくひまにかゞやきぬ

七

おくり迎ふるかずくの
たのしき郷の浦々や
げに疾く流れ疾く馳せて

船のほとりを過ぎゆきぬ

あるは海原一面に

燐火の光もえわたり

またあるときは船すぎし

水面の痕のひと筋に

闇をつんざき煌々と

燐火の光きらめきつ

またあるときは南洋の

衣もまとはぬ島人の

くしきかなたの森蔭に

船もやひせるあたりより

かざり刻める獨木舟に

花や菓實を積みおせて

漕ぎよせ來ることもあり

されどもかゝる珍らしき

花や菓實はありとても

ゆくてを慕ふわが船の

いかでとまらんとゞまらん

八

漂渺としてかぎりなき
海原はるかゆくてには
晝はひねもす夜もすがら
見ようつくしきまぼろしの
たえずたゆまずはせてゆく
そのまぼろしのかげを追ひ
捕へんとしてひたすらに

われらが船はいつまでも
そのゆくあとを慕ひゆく

そのまぼろしのかんばせは
見るめはるけき海原の
目路のかぎりをながめつゝ
ふりむくさまもあらざれば
またとこしへに見えわかず
はてしもしらぬ旅ながら

皆聲低ういひけらく
「あはれわれらがあこがるゝ
女神よいかに疾くゆくも
御袖とらへんそれまでは
あとを慕ひてやまざらん」

九

海原はるか慕ひゆく
その幻は一つなれど
求め追ふなる人々の

心々にあるときは
ふとかききえて見えなくなり
またあるときはいとくしき
黄金きらめく幻の
光かゞやきあるはまた
舳先に近く端巖と
「偉徳」「正智」の影のごと
あらはれいづることもあり
またあるときはいたづらに

巨浪おほなみさわぎあらぶとも
あまつみくによみがへる
たかき希望のぞみの姿すがたして
さかまく波なみの空そらたかく
狂くるへる海うみを瞰み下くだして
立たせたまへることもあり、
あるは潮鳴しほなる沖遠おきとほく
血ちぬらぬ銚さつさきさかしまに
この人ひとの世よをすくふてふ
「自由」の劍つるぎ提ひげて

現げんじたまへることもあり

十

されども船ふねにたゞひとり
心こころことなるものありて
たのしむ色いろもなかりしが
われらも彼かれをこのまざりき

わづかに今いまのさまを見みて
はるかに遠とほきゆくすゑを

得^え知^しらぬかれが小^こ腫^{ひきみ}は
眠^かみくもりてありつらん

されどわれらの眼^{まなこ}こそ
病^やみたりとしも罵^{のの}りて

あざむがごとく叫^{さけ}ぶらく

「愚^う者^けの船^{ふね}よとゞめよ」と

あるは泣^なきつゝあざけりて

「愚^う者^けの船^{ふね}よとゞめよ」と

かくてあらしの夜^よにまぎれ
山^{やま}とくづるゝ大^{おほ}浪^{なみ}に
われから身^みをば沈^{しづ}めしが
われらはなほもすゝみけり

十一

ながき船^{ふね}路^ぢにひとたびも
帆^は布^{ぬの}を巻^まきしこともなく
あしたゆふべにひとたびも
碇^{いかり}をなげしこともなし

光り添ふ世のうつくしき
榮光は慕ふわれながら
うつせみの世に掙しく
自然の則はいやしめて
心のゆくにまかせなん
されど旋風のたゞ中の
しづけき心をよこざりて
逆吹きよする疾風をば

ものとしもせでわが船の
すゝむ力はいづこより
あゝいづこより生れけん

十二

かのうつくしき幻の
導くまゝにしたがへば
再び船は北國の
寒き海邊にきたりけり

はてしも知らぬ船旅の
しげきなやみに撮取の
眼は盲ひぬ船長の
兩脚塞えぬ舟子らも
半ばは病みつうせはてつ

されどもよしや脚は塞え
眼盲ひんも何かあらん
よし眞幸くも病めりとも
たゞひたすらに逃れゆく

かの美しきまぼろしを
われらは永久に追ひゆかん

あゝわが船のゆくところ
たのしき此の世いつまでも
めぐり圓かにはてしなし
さればわれらが慕ひゆく
船路はげにもこれよりぞ
いやはてもなくとはならん

かひなき涙

こはテニソンが名高き物語歌「姫宮」(The Princess)の第四齣に挿める小唄にして、姫にさぶらへる女房の豎琴とりいで、奏づる歌のしらべなり。原作は聲調いといみじければ、その没韻の歌なるに心づくもの稀なり。千八百五十年(作者四十二歳)世にあらはる。

さちみてる
秋の大野をながめつゝ
ふたゝびつひにかへりこぬ
往にしむかしをおもほへば

なにの故とはしらねども
さよくくすしくいひしらぬ
くだけし心の淵よりぞ
涙は胸にせきあげて
雙の眼にあつまりつ
かひなくおつるわが涙

めにみえぬ
下半球の海こえて
われらの友をのせきたる

真帆にきらめく朝日子の
その初影のきよけさや

われらの戀ふる人をのせ
海路のはてにきえてゆく
真帆をいろどる紅の
その夕照のかなしさや

げにさばかりも往にし日の
かなしくもまたあたらしき

あけやらぬ
小暗き夏の黎明に
うせゆく人の目に見れば
窓は徐かに光さし
夜もほのくとしらみそめ
なかはばは夢の百鳥の
夙晨うたふ朝の歌
臨終の耳にきくばかり
あゝかなしくもふしぎなる

げにさばかりも往にし日の
かなしくもまたふしぎなる

なきあとに

憶ひぞいづるありし日の
そのくちつけのなつかしや

いまはあだなる人のため
わがためならぬくちびるに

おもふかひなきものぐるひ
ひとりこゝろにゑがくなる
そのくちつけのたのしさや

こひかやげにも初戀の
さばかりふかきものおもひ
しげき嘆きにむねさわぐ

あゝ往にし日をおもほへば
げにうつしよの身ながらに

よみぢをあゆむこゝちかな

妖 姫

紛々たる現世を超越して出世間の境に遊ぶといへども尙やゝもすれば消しがたき煩惱の焰にその思を焦す、危いかな、ひとたび塵界の汚濁に染まばいかでかよく其の業因を免るべけん。然れどもまた人生の利害を超越してその一切の交渉を断たば、人生は則ち無意義なり、文藝美術のこゝと亦かくの如きのみ。この一篇は蓋し當面の世間と出世間とに對する作者の觀念を寓したるものなるべく、また一面熱烈なる戀愛の不可思議なる力をほのめかしゝものと見なば見るべし。千八百三十二年（作者二十四歳）世にあらはる。

其の一

一

ながるゝ河の兩岸に
 大麥小麦生ひしげる
 畑地はるかにひろごりて
 岡野を蔽ひめぐりつゝ
 空のかなたにつらなれり
 畑地を縫ひてひとすぢの

道はつゞけりかず多き
 櫓ならべるカメロトの
 城のかたへとひとすぢに
 のぼりくだりにその道を
 往來の人は下手なる
 島のめぐりにシャロットの
 島のめぐりに咲きいでし
 河骨の花ながめつゝ

二

柳やなぎの裏うら葉は白しろく見みえ
 白しろ楊やなぎの葉ははうちふるふ
 そよ風かぜ吹ふけば河かはの面おもては
 かきみだされて黒くろずみつ
 水みづの流ながれはとこしへに
 河かは中なか島しまの岸きしに沿そひ
 カメロトさしてながれゆく

三

ひろき花はな野のをみわたして
 たちめぐらせる城しろの壁かべ
 ならべる四よつの城しろやぐら
 ねずみのいろに塗ぬられたり
 かくてさびしきこの島しまに
 かのシャロットの姫ひめ君ぎみぞ
 かくれすまはせ給たまふなる

河かはの岸きし邊べは枝えだ垂たるゝ

柳やなぎの木き々に々にに蔽おほはれつ

その流ながれにはに荷に足たりして

船ふねあし重おもき大おほ船ふねの

驚ど馬ばににひかかるゝ如ごとくにて

おもむろににこそ流ながれゆけ

岸きし邊べにに立たちて船ふねよばふ

人ひともななければ絹きぬばりの

真ま帆ほにに追お風かぜをを孕はらませて

水みづ面づをを迂すべりりとぶごとく

カメロトろさして下くだりゆく

さもあらばあれ誰たれかよく

かゝる折をりから手てをふりて

招まねける姫ひめを見みたりけん

また誰たかよく窓まどにより

たゝずむ姫ひめを見みたりけん

あはれ近わた傍たのひとにして

姫ひめを見みしれるものやある

このシャロットの姫君を

四

穂さきに毬彙生ふ大麥の
畑にたちいで朝はやく
麥かりいるゝ人のみぞ
刈りつゝ歌をさゝにける
げにその歌はかなたなる
やぐらならべるカメラトの

城へと目にもあきらかに
めぐり下れる川水の
流れよりこそたのしげに
いとかるらかにひゞきくれ

かくて夕になりぬれば
月の光もてりそめつ
ひるのつかれにうみながら
麥刈る人のかりとりし
麥の束をば風そよぐ

丘邊につみてかさねつゝ
またその歌をきゝながら
ひとりごつなり「あれこそは
くしきシャロトの姫君よ」

其の二

一
姫はかしこにこもりゐて
晝はひねもす夜もすがら
いろさまくゞにうるはしき

不思議の絹をぞ織りいづる

いづこともなき囁きの
姫が耳にぞきこえける
「もし織る梭の手をとめて
かのカメロトの城のかた
ながめやりなば忽ちに
禍災姫が身にふらん」

されども姫は禍災の

いかならんともしらざれば
よそに心をうつすなく
しづかになほも綾を織る

二

姫がまへにはてりわたる
くしき鏡ぞとこしへに
かけつるされて見えにける
鏡にうつるうつし世の
いそがしげなる影姿

手にとるごとくうつりつゝ

かのカメラトの城さして
めぐりて下るほど近き
大路のさまも見るがごと

シャロトの島をめぐりゆく
河のながれの渦まきや
野面をすぎゆくむくつけき
村の若衆やかよひゆく

市場少女のあかさ衣

三

またあるときはたのしげに
うちむれてゆく少女や
仔馬の鞍に手綱とり
しづかに乗りくる老僧や

またあるときはちぢれ毛の
羊飼なる若ものや

眞紅の衣を身につけて
髪たけ長さ小殿原
みなやぐらあるカメロトの
城をさしてぞゆく見ゆる

またあるときは碧なす
鏡のおもものふの
ふたりふたりにたち並び
駒そろへてぞ乗りくなる

あゝさるにてもこの姫に
まごゝろこめてひとすぢに
仕へまつらんものゝふぞ
シャロトの姫にはなかりける

四

さもあらばあれ姫君は
鏡にうつる人の世の
くしき相を綾絹に
やむときもなく織り出るを

たのしところは思ひけれ

げにもものゝねもたえはてし
寂しき夜半にいくたびか
野邊のおくりにもものゝふの
羽のかざりやともし火や
とむらふうたの樂の音や
カメロトさしてゆきにけん
されど月かげ空たかく

かゝれるころをきのふけふ
契むすびしこひととの
手をと리카はし來るも見つ
シヤロトの姫はかゝる見て
「鏡にうつる人の世の
影見ることもおほかたは
あきはてつとぞかこちける

其の三

一

姫がすまへるたかどの、
軒端のこなたほど遠く
矢ごろばかりをかけへだて
かのもものふは大麥の
つみかさねたる束をわけ
駒にうちのり近きぬ

葉越しに照らす日の光
爛々として眩ゆくも
武勇の公ときこえたる

ランスロットがよそほひし
黄銅しんちゆうづくりの脛すね當あてに
照てりかへしてぞかゞやける

手にせる楯たてのおもてには
赤あかき十字じのしるしをば
胸むねにつけたるものゝふの
ひとりひとりの姫ひめのおん前まへに
踞ひざまづきてぞとこしへに
侍はんにるさまをぞ書かきたる

その楯たての面おもてはシャロットの
はるけき島しまの大麥おほむぎの
黄金こがねの雲くもに照てりはえて
きららきららときらめきぬ

二

カメロットさしてもものゝふの
駒こまにうちのりゆくまゝに
黄金こがねいろなすあまの河がは
中なかに懸かれるひとつらの

星かとはばかり鏤めし
珠玉を飾れるもろ手綱
光あたりにはひらめきて
さらびやかにぞ光りつゝ
手綱につけし鈴の音は
いとたのしげに鳴りひびく

紋章ある飾帯
そのひとはしに大いなる
銀作り角形の

笛をかけてぞゐたりける

駒の足搔のゆくまゝに
鎧のひびきほど遠き
シャロトの島のこなたまで
憂々ところぞ鳴りにけれ

三

カメラトさしてものゝふの
駒にうち乗りゆくまゝに

碧くまなく晴れわたり
たゞひとひらの雲もなき
空の光に照らされて
鞍をつゝめる鞞皮
こちたく珠玉を飾れるが
きららきらと耀きぬ

兜もさてはよそほへる
羽の飾ももろともに
とみる焰の炎々と

燃えたつばかり照りはえぬ

げにそのさまをたとふれば
むらさきこむる夜のそら
その碧落をつらぬきて
銀沙まきたる星の世を
はるか下界に隕ちくだる
かの隕星の尾をひきて
光をはなち今こゝに
しづけきシャロトの島の上

空をわしるに似たりけり

四

そのものゝふのうるはしき
ひろき額は日輪の
光をうけてかゞやきつ
乗れる軍馬は飾ある
蹄鳴らして歩みゆく
のりゆくまゝに戴ける
兜をもれて鳥羽玉の

濡羽いろなす黒髪は
肩のあたりに垂れかゝる

カメロトさしてものゝふの
駒にうちゆくまゝに
岸をあゆめるその姿
流にうつるそのかたち
かの氷なす鏡にぞ
影ちらくとらつりける

流れにそひてゆきながら
ランスロットはたのしげに
ティラ・リラとこそうたひけれ

五

姫はふしぎの綾絹を
また織る機をうちすてゝ
三步室をば歩みゆき
かなたの岸に河骨の
咲けるをも見つ過ぎてゆく

かのものゝふが兜をも
羽飾をもちながめ
さみがゆくてのカメロトの
城のかなたを見わたしぬ

かくと見るまに綾絹は
あゝ忽ちに裂けちりて
ゆくへもしらに飛びうせつ
くしき力の鏡さへ
ひびきをなして真二つに

真中よりぞ碎けける

「あゝ災禍はわがうへに
ふりかゝりけれ今こそ」と
シヤロトの姫はさけびけり

其の四

—

どよもしあらぶ東風かぜに
力のかぎりたゝかひて

黄ばめる森は木々の葉も
うちおとされて瘦するらん

ひろき流れは波さわぎ
岸邊によせて咽びつゝ
空は曇りてすさまじく
槽ならべるカメロトの
城のわたりをかきくらし
篠つく雨ぞふりきぬる

姫は櫓をおりたちて
見れば柳の木もとの
波にたゞえふ捨小舟
舳のめぐりにみ手づから
シヤロトの姫とぞしるしける

二

げにも雄々しき豫言者の
ゆめまぼろしにおのが身の
やがて來ぬべき災禍を

知りにしさまもかゝりけん
氷のごとき面して
目退きもせて河下の
闇ほのぐろく漲れる
流れのかなたはるかなる
カメロト城をすかし見つ
やがてその日もくるゝころ
舟の鎖を解きはなち
姫は小舟にうちふしつ

溢れみなぎる河水は
シャロトの姫をうちのせて
はるかに遠く流れけり
シャロトの姫をうちのせて

三

身にまとひてぞうちふせる
雪かとまがふ白衣は
右に左にひるがへり
木の葉はかるくちりかゝる

夜のあらしの中をへて
カメロト城のかたをさし
たゞよひながらながれゆく

舟の舳の柳生ふ
岡邊をめぐりあるはまた
麥生の畑の中をすぎ
めぐりくつてゆきしより
カメロト城の人々は
シャロトの姫のうたひでし

最後のうたをきくにけり
姫がをはりのうたをこそ

四

げにそのうたは悲しくも
聖きしらべよあるときは
聲たからかにかあるときは
聲かすかにもひびきけり
姫が血潮のやうやうに
冷えて氷りて眼さへ

またく光をうしなひて
見えわかぬまでうたひつゝ
櫓ならべるカメロトの
城あるかたを眺めつゝ

ながれのまゝに汀なる
ほどこかき家につかぬまに
姫はうたをばうたひつゝ
シャロトの姫はうせにけり

岩・櫓の下を過ぎ

園生の垣にうちそひて

行廊めぐりほのかにも

光をはなちシャロットの

姫が屍はたゞよひぬ

花のおもはももの凄く

蒼みわたりて聲もなく

家居のなかをくゞりつゝ

カメロトさしてながれゆく

埠頭の上にもものゝふや

また市人もあて人も

女房さへもたちいでゝ

舟のめぐりにうちつどひ

舳にかける姫が名を

シャロットの姫とぞよみにける

あゝこは誰そや何人ぞ
 あゝまたこれはなに事ぞ、
 かゝるあやしきさまを見て
 燈火の光たてつらね
 わたりの宮にもよふせる
 王がたのしきうたげさへ
 今はひびきををさめたり
 カメロト城のものゝふは

あそれをなしておのが身に
 十字のしるしをむすびけり

ランスロットはさりながら
 しばし沈みてものおもひ
 さていひけらくかの姫の
 おもは藤たぐ見えにけり
 あはれ大神ねがはくば
 シャロトの姫が亡き靈に
 大御恵をたれたまへ

死にゆく白鳥

荒涼たる野山のながめをうつしたるに過ぎざれど、さすがに作者が自然を描く技倆の精緻なるを見るべし。千八百三十年（作者二十二歳）世にあらはる。

一

野^のもせには草^{のみ}繁^く
わびしくも荒^れはてたれば
ひろく人と人^けもたえて
はてしなく空^につらなる

野^の路^のはてゆきゆくかぎり
もの^がなし灰^色ぐもり
地^を蔽^ふ空^のはるけさ
穹^窿をたてつるごとく

かすかなるひびきをたてし
川^水のながれはゆけり
流れゆく水^のまに
むらぎものいきもたえ
白^鳥はたゞよひながら

音に立てゝなげくなりけり

日はまさに真晝のまなか
ものうげに風吹きそよぎ
川沿ひにすぎゆくまゝに
汀なる蘆の穂みだす

二

みどりなす嶺は遙かに
轟々と聳えたつ見ゆ

尾の上なる雪の冠は
氷なす冷たく白き
大空のいろに照りはえ
真白にぞ光りかゞやく

ゆく水に影を醸して
風見艸音にこそは泣け
風そよぎ歎息もるれば
枝ゆるぎ波をばみだす

大空の風ふくなかに
 おのがじゝ心にまかせ
 燕 ひらめきとべり
 碧澄むしづけき沼の
 はるかなる水面をこゑて
 たてよこにいりみだれてぞ
 紫にあるは緑に
 さては黄のいろさまゝに
 日の光あや織りなして
 ゆきかひの流れの路ぞ

眠れるごとと停まりはてたる

三

白鳥の臨終の聖歌に
 あれはてし野邊のこゝろも
 かなしみの中にかくれし
 よろこびのおもひとなりぬ

そのはじめ歌のしらべは
 低けれどこゑみちあふれ

ほがらかに耳にひびきぬ
中空をたゞよひめぐり
よわき音にひびきわたりつ
輓歌はひそかに
あるときははるかに遠く
あるときは近くせまりて
忍びねになほもつゞけり
されどまたそのおほいなる
よろこびのうたのひびきは

さまざまのくしきしらべと
もろともにあふれ流れて
はゞからぬ思ひのまゝの
うたとこそひびきいでたれ

たとふればつよき民人
笛ふきて鏡鉞打ちて
黄金の堅琴ならし
よろこべば歡呼の聲の
ほど遠きみやこのまちの

ひらかれし扉をすぎて
はるかにもどよめきわたり
夕づゝをひとり眺むる
牧人の耳にいるごと

あゝかくて土はふ苔も
まつはれる野のいらぐさも
白ばみて水にひたれる
川邊なる柳の枝も
風わたる汀の蘆の

波のごとなびくうねりも
鳴りかへすかなたの岸の
波されし角笛のねも

あれはてし流れのすみや
水たまる中にむれさく
白がねの沼の小花も
まひのぼりめぐるがごとく
わたりゆくうたのひびきに
ことくくみちてあふれぬ

ユリシス王

人生の意義は努力にあり精進にあり、安居して逸樂を貪るは剛邁ユリシス王の能く堪ゆるところにあらず。老いたりといへども奮勵一番して更に新天地の開拓を試みんかな。この一篇をさきの「無爲の島」に比すれば、かれはあくまでも纖麗軟弱、これはあくまでも剛壯勇健、蓋し好個の對照なり。原作は詞句嚴肅にして簡朴の趣をそなふ。千八百四十二年（作者三十四歳）世にあらはる。

げに益もなき日毎のわざ
なすこともなき王の身の

あれし岩根の中にして
しづけき宮居に年老いし
妃（二）ペ子ロプと二人すみ
蠻野の種族にたゞしからぬ
掟をはかり法を布く

蠻野の種族はこもりゐて
かくて眠りてかくて喰ひ
わが雄心をはかり知らず
われは旅ゆく歩とめて

やす居しをるにたえやらす
われは生命の酒甕の
のこる滴も嚙みほさん

あるときはまた陸の上に
またあるときは疾くはせとぶ
ちぎれくの雲をやぶり
雨をさそふとつたへいふ
七つの星のかげかすか
闇にくもれる海のおもを

みだしなやます嵐の日
われをしたへるものとともに
または身ひとり常にわれは
よのよろこびもくるしみも
夥しくぞ味ひぬる

あくことしらず求めしたふ
この心もてつねに世を
さまよひあるきすてに多く
巷のさまも人のさまも

國の相もまつりごと
心にしりつ目にも見つ
わが名は世にも聞えわたり
人にもいたく崇められ
われもかれらを敬へり

風吹くトロイの野邊はるか
ものゝねひゞき鳴る中に
いくさのにはのよろこびも
戦友とともにぞ味はひし

わが人格はすぎきぬる
苦き甘きもさまざまの
世の味ひのたまものよ
されどいまゝでわがへこし
試煉はこれをたとふれば
まだいたりみぬ幻の
はるけき國をほの見する
ゆくてのかどに外ならず
とはにはてなく進みより

近づくまゝに幻まぼろしの

くにのさかひはいよゝなほ
かすかに遠くきえてゆく

つとめをやすみ業をやめ

もちひざれば光りなく

みがゝてむなしく銹さびんこそ
げにいかばかりものうからめ

げに人の世はいきふくま

生命いのちに生命いのちかさぬとも

わが大おほいなる心こころには

あまりみじかきいのちなり
わが身みに許ゆるりしつかのまの

みじかき生命いのちはかなしや

さはれ雄々むむしき人の世よの

たゝかひの野のをすゝみゆく
そのひとときは永久とこしへの

ねむりよりこそまぬがるれ

いなこれさらに新しき
よの味ひをぞしらしむる

人のおもひのいやはての
西のかぎりをこえゆきて
沈む星影追ふごと
智識の光り追ひゆかん
もゆる願望はありながら
老いしころをいたづらに
三年の月日秘めかくし

閉ぢこめつるぞあさましき

こはこれわが兒テレマカス
王の位もこの島も
なれにとらせんわが愛兒
しづかにはかりめぐらして
このむくつけき島人を
心やさしくさてはまた
たゞおだやかにおもむろに
この島人をたなづけて

益あるやうによき方に
みちびきゆかんつとめをば
みたしえつべき賢し見よ

われいでゆかばテレマカス
母につかへつさてはまた
家を護れる神々を
あるべきさまにあがめつゝ
日々つとめをひたすらに
心にかけてあやまたず

譏笑を招くこと
ゆめくたえてなからまし

わが見はかれの業をなし
われはわが身の業をなす
かしこは港ふねのほは
風をはらみてはためけり
靄たちこむる大海は
波ほのぐらくほのめけり

わが舟人はわれとともに
いそしみ苦みさてはまた
こゝろもおなじ人々よ
つねにたのしくよろこびて
はためき下る雷や
灼く日の光迎へつゝ
たのしく雄々しくかくまはる
胸をひらきて眞額を
ふりかざしてぞむかふなる

げに人々もわれもまた
老いにけらしなさりながら
老には老におのづから
ほまれいそしみあるものを
死こそすべての終なれ
敵トロイをたすけつる
かの神々と争ひし
その名にはおぬ人々よ
たまの緒たへぬそのひまに
なにしてもある尙さら

たうときわざをなしはてん

みよ家々のともし火は

またゝきそめぬ岩間より

長きひとひも影うすれ

月はしづかにさしのぼり

海は潮音もかきみだれ

なげくがごとく咽ぶなり

きたれわが伴侶いまはなほ

あたらしき世を求めんに

おくれたりとはいひがたし

纜解きて船をやれ

櫂おしなめてなりひゞく

しぶきの波をうてよかし

われは落日の波をこえ

星かげしづむ西のかた

はるけきはてをうちこえて

屍を波にさらすまで

なほもゆかんと思ふなり
 底ひもしらぬ海淵の
 底の藻屑とならばなれ
 徳ある人のゆくぞてふ
 浄士の島にいたりてぞ
 われに鎧をゆづられし
 アチルスにこそ逢ふべけれ
 われらの友は數多く
 うせはてつれどなほ多く

ともにあるあり今はよし
 むかし天地をうごかし
 力強にはあらずとも
 なほかくのごとかくてあり
 雄々しくきよくもろともに
 おなじこゝろの身にしあれば
 運命の手になやまされ
 年へてよわくなりつれど
 なほあくまでも從はず
 努めもとめてみいでなん

こゝろはつよし今もなほ

註

- (一) 妃ペネロプと二人すみ ユリシス王已にイタカの島に還りて暫くは一家の團樂を樂みしも、雄心勃勃閑居靜逸を貪るにたへず、又再びはるかなる理想の郷を追はんとす。
- (二) トロイを助けつるかの神々 ヴァイナス(Venus) マーズ(Mars)の諸神トロイ軍を助けしよしホーマーの「イリアッド」にも見えたり。
- (三) アチルス アチルス(Achilles)は有名なる希臘の古英雄なり。同じくトロイ戦争に雄名を轟かししも、遂に戦場の露と消え、其の平生用ひし鎧はこれをユリシスに授けられぬ。

こ だ ま

これも亦さきの「かひなき涙」とひとしく「姫宮」の第三齣のはじめに挿める小唄なり。

夕陽の光めもあやに
耀さわたり天くだる
城の砦の壁のうへ
かたりふりにし雪の嶺

光は遠く湖水の

しづけき波にうちふるひ
 とゞろき落る大瀑は
 黄金の榮光を身にあびて
 おどるが如く跳びくだる
 吹けや角笛吹きならし
 すごきこだまよ遙かにも
 あまがけりつゝひゞきゆけ
 ふけよつのぶえ

こたへよこだま
 かすかにかすかに
 かすかになりつゝ
 あゝきけよきけ角笛の
 ひゞきかすかに瞭らかに
 いやゝかすかにあきらかに
 遠くはるけくきえてゆく
 こゝしき岩根岩角の

はるかには遠きかなたより
靈くしびの神かみのかんつどふ
あまつみくくの笛ふえの音ねの
ひびきかすかに吹ふきすさぶ
そのしらべこそいみじけれ

吹ふけや角つる笛ふえ吹ふき鳴ならし
紫むらさきこむる谷たに々々の
かへすこだまをきかしめよ

吹ふけやつのおえ
こたへよこだま
かすかにかすかに
かすかになりつゝ

笛ふえのひびきは光ひかりそふ
かの大おお空そらの雲くもにいり
丘おか邊べに野の邊べに川かの邊べに
かすかになりてきえゆけど
君きみよふたりが呼よびかはす

おもふこゝろのひゞきこそ
むねよりむねにかよひつゝ
めぐりてとはにとこしへに
やむときもなく鳴りひゞけ

吹^ふけや角^つ笛^{ふえ}ふきならし

すぎきこだまよ遙^{はる}かにも

あまがけりつゝひゞきゆけ

ふけよつのぶえ

こたへよこだま

かすかにかすかに

かすかになりつゝ

船出

人生の日已に暮れて夜見の旅路は遙かに今や永^{かぎりなき}生の海に行かんとす、
目に見えぬ尊き神ありてやすらげく我等を導かせたまふ。この讚美のう
た一篇は、蓋しテニソンが最後の安心をうたへるものにして、遺言して
おのが集中の末尾に收めしめき。千八百八十九年（作者八十一歳）の作
にかゝる。

日は没りて夕づゝいでぬ
ほがらかに我を呼ぶ聲す
とこよの海にいでたつ折よ

ながれより淺瀬にさわぐ
あだ波のなげきはなかれ
人のよのいまはのはての
かなしみはなかれとねがふ

瀬にむせぶ波の音はなく
よのはてのなげきはなかれ
かぎりなき大和田津海の
底ひよりよせくる潮の
たちかへりふたゝびゆけば

流るれど眠れるごとく
音もたてず泡をも立てぬ
満潮のみちて湛へて
胸ふかく溢るゝうれひ
そこひなきなげきはいだけ
ほのぐらくたそがれゆけば
夕つぐる鐘の音かすか
やがて世は闇にかくれぬ
わが世さり船出はすとも

とこしへの別れのきはの
かなしみはなかれとねがふ
人の世のいまはのはての
かなしみはなかれとねがふ
よしやわれ時空の外に
大和田の流れにまかせ
はこばれて遠くゆくとも
波さわぐ浅瀬をわたり
人の世のさわみをゆけば

みちしるべわが守る神を
まのあたり見んとぞおもふ

テニソンの詩終

明治三十八年九月三十日印刷
明治三十八年十月五日發行

テニソンの詩

(定價金三拾錢)

編纂兼
發行者

平山勝熊
東京市京橋區尾張町一丁目一番地

印刷者

佐久間衡治
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所

株式會社 秀英舍
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

東京市京橋區尾張町一丁目

會社 隆文館

發兌元



序君石漱目夏 士學文
譯 君 雨 白 瀨 浦

夏目文士の
一文一節
われ若しわが隣人と一微塵の異なるなくんば誰か我存在
の價値を認むるものあらん。詩人の傳ふべきは貂を續ぐ
に貂を以てするの才あるが故にあらざる。太倉の粟陳々相
依る。昔人既に之を思めり。
ヲイッゾヲリスの詩別に一家の機杼ありて漫に他人の籬下
に立たず。題を村翁に籍り興を潤花に托す。此一事既に
彼を傳ふるに足る。獨造憂々なれば片言も亦百代の師た
り。好悪は問ふところにあらず。

ウ
オ
ル
ヅ
ヲ
オ
ス
の
詩
新形美本
定價廿五錢
郵税金四錢

本内
ヲオヅヲオス曰く、「詩をして貴からしむるは、貴人を題
となすが爲めにあらず、用語の綺麗なるが爲めにもあら
ず、唯だ感情の眞なるにあり。人の詩を讀むは言辭の美
なるを學ばんが爲にあらで、思想の美を樂まんが爲めな
り」と。實にや思想の美、感情の眞少くとも原著者ウオ
ヅヲオスが所期の一端は、我が浦瀨白雨君の忠實なる譯
に依て窺ひ知らるべし。

キーツの詩

田山花袋君譯 本多穆堂君意匠

英詩人鬼哭の詩才と萬石の情熱を藏
キーツ、然天才の獲つるところを、詩壇に傾注
して止まず、一作、ま清奇に酔め、情に酔めし文
彩に叫め、天啓の才調に驚嘆せしめざるは
花袋氏は青春の熱血燃ゆるが詩人にして
の詩心讀り、今ま其の集中の神品、靈品を擇
其の眞趣を描き來る、讀文藝の眞致を愛せば西
花の餘香薔薇の香の句はしきより

製本 總クロス金銀模様 定價五拾錢 郵税六錢
新式詩集形跡裁頗美

東 京 隆 文 館 發 兌

發 兌 元 東 京 隆 文 館

守花

横瀬夜雨君著

定價四拾五錢

郵稅六錢

夜雨君は眞詩人なり、其詩や眞詩なり、眞情の聲なり、眞情其まゝを攫み出して、直ちに紙上に抛ちたる血塊の跡なり、之を讀めば哀音惻々として直ちに人に迫り、悲雨凄風襟を吹いて、人をしめて嗚咽し、啼哭するに堪へざらむ。眞韻獨り此人に聞くべし。眞情獨り此人に探ぬべし、茲に一篇の哀史にして、而も靈彩渾然として、絶えて一點の汚塵なき神品なり、夫れ筑波は濃紫に暮残るたそがれ、眉顰み、面蒼き詩人の涕を此篇に髣髴して、誰れか筑波根詩人の薄幸に暗涙あり、此の詩才の天成に瞳目の感あらんものぞ。

三宅克己君畫

體裁

クロース装釘金文字入

美本

館文隆

東京東
橋張尾

元兌發

